

千河原遺跡の遺構は、遺物の出土量が少ないため時期の確定が困難な点も多いが、一応4時期に分けた変遷を把握することができた。ここで注目されるのは、北区の竪穴住居跡群と南区の掘立柱建物跡群の関わりである。出土遺物等の検討からは、まず第Ⅰ期(10世紀中葉)に竪穴住居跡が出現し、つぎに第Ⅱ期(10世紀後葉)には掘立柱建物跡に変わり、掘立柱建物跡は第Ⅲ期(11世紀前半)にも引続くという結果を得ることができた。

庄内地方の平安時代における住居跡は、これまでの発掘調査による内容では掘立柱建物跡が主流を占め、竪穴住居跡が検出された例は極めて少ない。しかし今年度になって千河原遺跡や遊佐町吹浦遺跡などから竪穴住居跡がまとまって検出されており、掘立柱建物跡との関連について改めて検討すべき段階にきている。次節では、庄内地方の竪穴住居跡について考察を加えてみる。

## 2. 庄内地方の竪穴住居跡について

庄内地方で検出された竪穴住居跡は今年度(昭和58年)の検出例を入れて6遺跡・19棟確認されている(表7)。一遺跡で多くの例が検出された遺跡は、本遺跡の9棟と遊佐町吹浦遺跡の5棟である。この2つの遺跡で庄内地方検出例の7割以上を示し、竪穴住居跡集落の在り方など、検討を試みる好資料となる。この他には、立川町真木遺跡、羽黒町郷の浜C遺跡、鶴岡市上野山遺跡などが分布調査で竪穴住居跡の存在が確認されている。

竪穴住居跡を検出する遺跡には2つのタイプがある。一つは遺跡内に1～2棟の竪穴住居跡が存在するタイプで、遊佐町地正面遺跡、八幡町俵田遺跡がこれに入る。もう一つは10棟前後で集落を営むタイプで吹浦遺跡や本遺跡がこれに入り、余目町上台遺跡もこれに含まれると思われる。上台遺跡は竪穴住居跡が1棟検出されただけであるが、調査された地区が台地縁辺部に通る新設道路内であったことで、その他の地域にも同様な住居跡が多数存在することが伺える。

地正面遺跡と俵田遺跡は平野部に存在し、遺構は掘立柱建物跡を主とする集落跡内にあり、竪穴住居跡は集落における何らかの施設としてその存在があったものと考えられる。そして両遺跡を除けば、多くの遺跡は眼下に低地を見おろす台地上に立地する。顕著な検出例として吹浦遺跡と本遺跡がある。吹浦遺跡は、標高6～16mの台地上に立地し、南方に突出した緩やかな傾斜面に5棟の竪穴住居跡が検出されている。標高12m前後には平面形が一辺2.8mを呈した方形に整った4棟の住居跡、12～13mには一辺5～6mの長方形ないし方形を呈したやや大型の住居跡が分布し、二群に分かれる(註1)。千河原遺跡では、9棟の竪穴住居跡が検出され、主軸方向などで2つの群に分けられる。

竪穴住居跡は、縄文時代から営まれてきた普遍的な住形態である。各時代によってそ

の様相は違ってはいるが、古墳時代から奈良・平安時代にかけては方形ないし長方形を呈し、4本の柱で形作り、炉からカマドへと変ってゆく。吹浦遺跡では一辺約3mのやや小さな住居跡と一辺約5mの大型の住居跡が存在し、各々にカマドを壁におき、一部では煙道も確認されている。千河原遺跡では一辺3m前後の住居と一辺4m前後の住居が確認され、カマドは住居跡コーナーにしている。煙道は水田・畑地耕作が深く確認されなかったが、本来は設置していたものと考えられる。

竪穴住居跡の在り方について2つのタイプに分けたが、その時期は先に述べた倭田・地正面遺跡が9世紀代に、その他は10世紀から11世紀代に相当する。そして竪穴住居跡は掘立柱建物跡と共存し、その両者の間に時期的な先後関係は今のところ認めることができない。従来庄内地方における平安時代の住形態は、山形県の内陸部等とは異なり、掘立柱建物跡が主流を占めると考えられてきたが、これについて再検討の必要が生じてきたといえる。

庄内地方の平安時代の住形態が遺跡によって掘立柱建物跡を主とする集落跡と、竪穴住居跡を主とする集落跡に分けられることについてはいくつかの要因が考えられる。

一つは立地的条件である。庄内地方の地形的概観の中で掘立柱建物跡を主とする集落が立地する標高10m前後の庄内河間低地は、強グライ層で水位の高い土地である。このような地形上には竪穴住居跡を営なむ事は不適であり、竪穴住居跡を主とする集落は、低地を見おろすことが出来る台地上や、平野部でも高所となる自然堤防上に立地する事にもよる。

さらにもう一つの要因は歴史的条件があげられる。平安時代、出羽国府として9世紀に入って城輪柵跡が平野部に突如として造営され、その周辺に居住していた人々を律令制という大きな枠の中へ組み入れ、城輪柵跡を中心とする計画的な村落を配置した(註2)。城輪柵跡内の役所の建物を作り出す木材の供給が豊富だったことにより、配置された村落内の住形態が掘立柱建物跡を造る事を、容易に成しえたものと考えられる。この事については、近年来県教育委員会で実施している城輪柵跡周辺の遺跡調査で証明されており、特に10世紀代に入ると掘立柱建物跡を主とする集落跡が爆発的に増加する。また計画村落に組み込まれることが出来なかった最上川以南や日光川以北の地域でも立地条件に勝る掘立柱建物跡を主とした集落跡が営なまれたものと考えられ、一部には本遺跡のように両者が共存する遺跡も営なまれたものと考えられる。

竪穴住居跡と掘立柱建物跡の歴史的意味として、竪穴住居跡が台地上に立地することからこれらの人々は狩猟・漁猟民(山夷)、掘立柱建物跡が平地に立地することから農耕民(田夷)であると言われてはいるが(註3)、一概にはそうとも言えない。ただし、竪穴住居跡に伴う土器として刷毛目を施こされている土師器甕などが多く出土している傾向があり、今後検討を加える上で重要な問題となろう。

表7 庄内地方竪穴住居跡検出例一覧

番号	遺跡名	遺構名	所在地 市町村・大字・小字	平面形	規模(m) 東西×南北	床	主柱穴	周溝	炉・カマド	時期	備考	文献
1	千河原	ST2	余目町・千河原・五輪地	隅丸方形	3×3.2	良好	—	—	—	10世紀中葉		
2		ST3		方形	2.9×2.8	良好	4	南辺に一部	中央部に炉	10世紀以降		
3		ST4		方形?	—	やや良	—	—	—	10世紀	精査区内4分の1検出	
4		ST6		方形	2.4×2.6	良好	4	—	—	10世紀	ST12と重複	
5		ST8		やや長方形	4.4×3.6	良好	4	北辺に一部	北西隅にカマド	10世紀中葉		
6		ST9		隅丸方形	3.4×3	良好	4	—	—	10世紀		
7		ST10		—	—	やや良	—	—	南西隅にカマド	10世紀中葉	住居跡3分の1検出	
8		ST11		長方形	4.3×3.5	やや良	—	—	西辺にカマド	10世紀	SX7と重複 (旧) ST11→(新) SX7 北東コーナーに貯蔵穴	
9		ST12		長方形	2.4×2.9	良好	—	—	—	10世紀中葉	(旧) ST6→ (新) ST12	
10	上台	ST2	余目町・廿六木・上台	隅丸方形	4.5×4.9	良好	3	—	南東隅にカマド	10世紀後葉		1
11	岡山	第4号	鶴岡市・井岡・岡山	方形	4.4×4.6	良好	2	—	東辺にカマド	10世紀後葉	床面一面に炭化物散布 住居跡東半部の検出	2
12	俵田	ST1	八幡町・岡島田・俵田	隅丸方形	4.34×2.92	やや良	7	—	中央やや北西に炉	9～10世紀		3
13	地正面	ST146	遊佐町・下小松・地正面	長方形	3.3×3.8	良好	3	各辺に一部	—	9世紀末葉	ST147と重複 壁柱穴多数あり	4
14		ST147		隅丸方形	3.3×4	良好	3	南辺に一部	—	9世紀後葉	(旧) ST147→ (新) ST146	4
15	吹浦	ST1	遊佐町・吹浦・一本木他	長方形	4.2×6	良	2	—	—	9世紀前半	縄文時代遺構と重複	5
16		ST4		方形	3.1×3.3	良	3	—	南辺にカマド			5
17		ST5		方形	2.6×2.8	良好	4	—	中央に地床炉		ST6と重複	5
18		ST6		方形	2.6×2.9	良好	4	—	中央に地床炉		(旧) ST6→ (新) ST5	5
19		ST7		方形	2.5×2.6	良好	4	—	中央に地床炉			5

註1 渋谷孝雄他 「吹浦遺跡発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財調査報告書第82集 1984年

註2 野尻 侃他 「関B遺跡第2次発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財調査報告書第68集 1983年

註3 新野直吉 「柵戸の意味」 山形県史第1巻原始・古代・中世編第7章第2節3項 1982年

### 参考文献

文献1 名和達朗他 「上台遺跡」 山形県埋蔵文化財調査報告書第14集 1978年

文献2 山形県教育委員会 「岡山・山形県における原始住居跡と立石遺跡」 1972年 遺構」

文献3 佐藤庄一他 農林事業関係遺跡(2)「俵田遺跡第1次」 山形県埋蔵文化財調査報告書第64集 1983年

文献4 佐藤庄一他 農林事業関係遺跡「地正面遺跡」 山形県埋蔵文化財調査報告書第51集 1982年

文献5 渋谷孝雄他 「吹浦遺跡発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財調査報告書第82集 1984年